ではなくて、理想的の動機が主要の働らきをして居ることを發見する、といふことを主張した。そして其れにも拘らず、唯物史觀は正しいといふことを主張した。更に私は、社會を變化の過程のうちに觀察すると、或る一定の時期に於ける或る社會の活動に重要な働らきをしてゐる思想は、その當時の、若くはそれ以前の、經濟上の狀況に由來することを發見する、そこで社會の歴史を哲學的に考へると、社會進化の第一の要素は、經濟上の要素であると云ふことになる、と主張した（註一）。

そこで私は、大體に於いて右の論文は、混亂的であり有害であると批評する。卽ちこの論文は、正確な社會主義の教義と、是等の教義と矛盾した（今ま批評したような）見解との混合物であるから、混亂的である。そして社會主義の敵の思ふ壺にはまつて、彼等に唯物史觀を曲解する口實を與へるものだから、有害である。吾々の敵は、唯物史觀を實踐の上の理想主義に反對するものとして、低級な唯物的人生觀と同一視しようと、常に試みてゐるからである。

私が殊にこの論文に反對した譯は、斯よな見解が、單に同志ラモント一個の意見としてゞはなく、全べての社會主義の大家の取つてゐる教義として述べられて居るからである。ところが私の寄書は、エチ・エル・スロボディンの激怒を惹き起した。彼は人身的の惡口や、辭書にあらん限りの

形容詞で飾り立てた一大論文（一九〇〇年十一月四日の『人民』）によつて、私の『無智』と『傲慢』と、就中、私の『高尚な品性』に對して、猛烈に挑戰したのである。

彼れの論點は、この議論に關係のある範圍では、次の通りである――

（一）ラモントが、金錢上の利害が個人の生活を支配すると主張したかの如く解するのは、彼れの論文を曲解したものである。

（二）假りにラモントの意は、經濟上の要素が社會の歴史を支配するのと同じように、自己の物質上の利害が個人の生活を支配すると云ふにあつたとしても、尚ほ且つ彼れの立場は正しい。なぜならば斯ような見解は、『人民』（ゼ・ピープル）の寄書に述べた私（ブディン）の見解よりは、歴史的唯物論に一層近いからである。本文を引用すると斯うである――『同志ブディンは、ラモントの主張とは大に違つた意味をくつ附けて、之を曲解する。即ちラモントの經濟的の條件といふ言葉を、「金錢上の利害」と解してゐる。然し斯ように曲解せられたところで、尚ほラモントの主張は「ブディンの品性高尚な理想主義」よりは、遙かに歴史的唯物論に近いものである』。社會主義者は實際生活の上では、『最も純な理想主義者の典型』であるのが常であると云つた爲めに、私は有ゆる罪惡を犯した譯であるが、スロボディン自身の古典的の言葉を用ひると斯うである――『私は社會主義者が、之

を嘘と思ふか、それともおべつかと解するかを判ずるに苦むものである。しかし私自身は斯う遣り返へしたい。「同志ブディン、君もその一人だ」と――』

之にもまさる大きな罪科は、私が實際生活の上では、人々は正義の觀念や理想によつて動いてゐると述べたことである。

そこで以上によつて、今こゝに爭點となつてゐる問題は、次の二つの點に歸着する――

第一　果して私は、ラモントの論文を曲解し、その意味を附會したか。

第二　唯物史觀は各個人の行爲にも當て嵌まるか。言葉を換へて云へば、個人の行動を起させる要因は、社會を動かしてゐる要因と同一であるか。更に劃切に云へば、個人は金錢上の利害のみで動いてゐるといふ見解は、唯物史觀は實踐上の理想主義とは沒交渉であり、從つて社會主義者は實際生活の上では理想主義者たり得るし、また理想主義者であるのが常であるといふ見解よりも、果して『遙かに歴史的唯物論に近い』であらうか。

そこで云つておきたい事は、本論の目的からは、ラモントの主張そのものが正しいか否かは、どうでもよいのである。尤も之に就いても、一矢を酬ひる機會があることゝは思ふが、此の場合

の唯一の問題は、ラモントと彼れの友人との主張するところは、果して信憑すべき社會主義者の意味する唯物史觀であるかどうかと云ふ問題である。私は『人民』への寄書のうちに、自分がラモントの論文に反對するのは、主として、彼れが自分の見解を以つて信憑すべき社會主義者の見解であると主張するからであつて、私の見るところでは、是等の見解はよし立派なものにもせよ、信憑すべき社會主義者の見解ではないのである。そして私は唯だ、それだけの事を立證したいと思ふ。

カール・カウツキーは『ノイエ・ツァイト』の誌上に（第十五卷、第一號、第二百十五頁）斯う云つてゐる――『私はツァイト誌上のバックスの論文に答へて、彼れは物質的條件と物質的利害とを混同する沒常識な見當違ひに陷つてゐることを指摘した。バックスは果してどう答へるか。彼れは物質的條件と物質的利害とを混同することに滿足しないで、この二つの言葉を取り替へることの不條理を警告された後までも、現に尙ほこの混同を繰り返へして居るのである。或る社會の物質的條件とは、何を指すものかを、バックスは果して知らぬであらうか。物質的條件とは、生産の條件である。但し生産の條件といふ言葉を、最も廣い意味に解してのことである。何人か唯物史觀に取つては、生産の條件といふことは、階級または國民の物質的利害といふことと同一だと主張し

得るであらうか。(若しカウツキーが、物質的條件を階級または國民の物質的利害と混同することを以つて足れりとしないで、現にそれを各個人の物質的利害と混同する唯物論者がこゝにゐると聞いたなら、きつと驚くに相違ない)。この二つの言葉の相異は、次の如き考察によつて知ることが出來る——私の見るところでは、基督教徒が現世を厭ふて死に憬がれたことも、ローマ帝國當時の物質的條件によつて説明することが出來る。けれども死に對する憧憬の原因を、物質的利害に求めるに至つては、沒常識である!』。

カウツキーは更に斯う云つてゐる——『また他の人々は、動物有機體と社會有機體、社會進化の法則と個體と種との進化の法則とを、同一の壺に投げ込んでゐる。』

之は正さに頂門の一針である。社會進化の法則は、個體進化の法則と同じでない。そして社會進化の場合に於いてすらも、その動力となるものは階級または國民の物質的利害ではなくて、それとは全く別物たる、物質的條件である。

以上に引用した文章のうちに、カウツキーが暴露した無智の當然の論理的歸結として、その次には、歴史に對する個人の役割に關する彼れの見解がある。ラモントによつて布告せられた『經濟的決定論』の大教義——各々の個人に、その物質的利害に從つて行動することを强制する大教義

に無智なるカウツキーは『傲慢』にも、此の點に就いては次の如き意見を述べてゐる――『吾々は今ま人間――若しお好みとあらば精神、心理的衝動、觀念――が、歴史の上に如何なる役割を演ずるかと云ふ問題に當面する。唯心哲學者に取つては、觀念は一つの獨立の存在物であるかも知れぬ。しかし吾々に取つては、觀念は唯だ腦髓の一機能に過ぎぬ。そしてこの觀念は社會に影響を與へるか、また如何に影響を與へることが出來るかといふ問題は、吾々に取つては、個人は社會に影響を與へるか、そして如何に影響を與へることが出來るかといふ問題と同一である。そしてバックスが私の見解に反對のつもりで提出した主張――「經濟的の基礎は、人間の精神と意志と結合してのみ、初めて歴史を造るといふ主張――に私は全然同意すると云つたなら、彼は大に驚くであらう』。

憐むべしカウツキーは、數冊の博物學、乃至は少くともラモントの論文を讀んでゐなかつた。若し讀んでゐたなら、彼れは『人間』や『人間の精神』に就いて、こんな馬鹿げたことは云はなかつたらう。そして人間と人間の性質とに就いては、語るべき何物も無いといふこと、それから『故意に』自分を一友人の爲めに犠牲とすることが分つてゐる『小いがしかも獰猛な豚の一種がある』ことも知つて居つたらう。

ところがカウツキーは、無智に安んじてゐる。そこで斯んなことを云ふ――『一方に於いては、彼れ(個人)が專心する問題の選擇、これが解決に進む見地、解決を求める方向、そして最後に其の爲めに戰ふ精力。すべて是等のことの說明は、單に經濟的條件にのみ求めることは出來ぬ。即ち經濟上の條件と同時に、其の個人が生まれつき持つてゐた特質の爲めに發達した性質や、其の個人を圍繞する特殊な環境も亦た働きをする。すべて上に揭げた情況は、究極は避けることの出來ない必然の結果に進む方向に影響を與へることが出來ぬとしても、この結果に進む方法と徑路とに影響する。この點に於いては、一人々々の個人は、同時代の人の爲めに大なる貢献、極めて大なる貢献をすることが出來る。……即ち或る者は思想家として周圍の人々よりも一層深刻な知識を得ることにより、周圍の人々よりも一層よく、傳統と偏見とを脫することにより、また階級的の偏見に打ち克つことによつて、大なる貢献をすることが出來るのである』。

以上によつてカウツキーは、或る人々は、彼等が單に思想するといふだけの理由によつて、同時代の人々に大なる貢献をすることが出來るといふ意見であることは明かである。そして斯ような善事をする爲めには、彼等は單に、自分の物質的利害を沒却するばかりでなく、その階級の愚昧と偏狹とに打ち克つのである。その階級の物質的利害に超越し、

この最後の、階級的の偏狹に就いての一句には興味がある。カウツキーは疑ひもなく、謂ゆるマルクス主義者の或る者に當つてゐることを承知の上で、自分の立場を次の如く説明する――『この最後の主張は、マルクス主義者の口から聞くのは奇妙に思はれるかも知れぬ。けれども社會主義は實際に於いては、階級的偏狹の打破を基礎とする。偏狹なブルジョアに取つては、社會問題とは、如何にして勞働者を柔順にしておき、彼等の必要品を最少限度に切り詰めるべきかといふ問題である。そして偏狹な賃銀勞働者に取つては、それは單に胃の腑の問題、賃銀增額の問題、時間短縮と雇傭安全の問題に過ぎぬ。吾々は斯ような双方の偏狹に打ち克つてこそ、初めて現在に於ける社會問題の解決は、もつと大なる意義を有しなければならぬこと、そして其の大なる意義は、新しい社會形態によつてのみ初めて達せられるといふことを理解するのである。……傳統と階級的偏狹に打ち克つた思想家は、一段高い見地に立ち、之によつて新しい眞理を發見する。即ち一般の人々よりも、一般の問題の眞の解決に近づくのである。けれども彼は、全べての階級に喜ばれると思ふてはならぬ。彼れに同意するのは、一般進化の方向と利害を均くする階級だけである。彼れが餘りに其の周圍から掛け離れた場合には、此の階級の人々すらも、彼に同意せぬ。』

經濟的條件の影響する限度と、この影響が社會に與へる作用如何といふ問題については、カウ

ツキーはベルンシタインの有名な著書に答へて『ノイエ・ツアイト』に書いた論文のうちに、もつと詳しく述べてゐる。カウツキーは唯物論に關する此の論文のうちに斯う云つてゐる。――

『ベルンシタインが吾々の注意を促がした種々なる要素を、今ま少し精密に觀察して見よう。そこには生産力と生産の狀況と共に、法律上道德上の觀念があり、歷史的宗教的の傳統がある。よし唯物史觀の「一層進步的な」定式に從ふにしても、是等の傳統は、それ以前の社會形態の産物であり、從つてまた、それ以前の生産形態の産物でなくて何だらう。法律上道德上の觀念も亦た、それが傳統的のものであつて、現在の社會形態から生じたものでない限りは、同じく前時代の社會形態の産物であり、從つてまた、前時代の生産形態の産物である……

『そこで吾々は精密に調べて見ると、ベルンシタインの指摘したような、歷史の上面（うはつら）に働いてゐる諸要素は、究極の經濟的要素に還元することが出來る。そしてベルンシタインの要求は、或る一時代の歷史は、その時代の經濟史のみでは說明し得ぬものであつて、吾々は之に先だつ經濟的發達の全部を――原始時代からの遺産と共に――計算に入れねばならぬといふだけの意味である……

『若しベルンシタインの主張の意味が、唯物史觀はその初めには、或る時代に行はれてゐる生産

形態の直接の影響を過重視して、それ以前の生産形態の影響を過少視した、そして此の意味に於いて唯物史觀は進歩したと云ふのであつたなら、成るほど之には議論の餘地がある。實際の上からも、唯物史觀が初めて定義を與へられた當時には、有史前の研究はやつと着手されたかされぬかと云ふ有樣であつて、この研究が進歩した結果は、唯物史觀に重要な影響を與へてゐる。斯ような意味に於いて、此の學說が發達したことは明かであつて、唯物史觀の創定者自ら認めてゐる事實である。』

讀者諸君は、カウツキーに取つては、社會に行はれてゐる法律上道德上の觀念がその社會の上に大なる影響を與へるといふことは――社會の變化は個人といふ要素によつて行はれるものであり、そして個人は(カウツキーの考へでは)勿論、法律上道德上の觀念の影響を受けるものであるから――無論の話であることを解せられたであらう。そこで彼れに取つて議論の餘地のあるのは、その起原如何の問題である。即ち法律上道德上の觀念は、その社會自體の經濟的諸勢力と經濟的狀況との產物たることを明かにして、直接に當時の經濟的條件に歸することが出來るか、それとも、是等の觀念は前の時代から承け繼がれたものであり、從つて是等の觀念が現に影響を與へてゐる社會の經濟的條件の產物ではないにしても、それは元々は經濟的條件の產物である――即ち

それ以前の社會に於ける經濟的條件の産物である――といふことを明かにして、唯だ間接に、當時の經濟的條件に歸することが出來るかといふ問題である。之に就いてもカウツキーは（上に掲けた、バックスに對する答のように）斯う云ふのである――或る思想上の影響は、たゞ間接に經濟的條件に遡ぼることが出來るに過ぎぬ。そこで問題は、その當時の經濟的條件で說明の出來る思想的影響と、吾々が親たちから承け繼ぎ、從つてそれ以前の歷史的時代の經濟的條件によつてのみ說明の出來る思想的影響との、いづれが有力であるかといふ、比較の問題に歸着するのである。

そして此の最後の問題、間接直接いづれの思想的影響が有力であるかといふ問題に就いては、カウツキーは唯物哲學の幼年時代に當つて、夙に斯う云つてゐる――吾々はやゝもすれば、間接の影響を過少して、直接の影響を過大視する傾きがある。けれども今や吾々が、唯だ間接にのみ經濟的條件に溯ぼることの出來得る思想的影響の力を、充分に認めることは、近代的唯物哲學の父たるマルクス、エンゲルスの見解に反對するものではなくて、一致するものであると。

謂ゆる經濟的條件の間接の影響なるものは、現在吾々の經濟上の利害乃至は物質上の利害とは、全然關係のないものであり、現在吾々の經濟的條件（カウツキーの用ひたような意味での）とすらも。全然關係のないものだといふことを記憶したならば、カウツキーの見解は、畢竟これだけ

のことに歸着する――個人は、理想上の動機によつて行動してゐるばかりでなく、道德上（この憎惡の的になつてゐる『道德上』といふ言葉）、法律上、その他現在社會の經濟的條件とは、少しの關係もない思想上の影響も亦た、個人の行動に重要な作用をするものである。

マルクスとエンゲルスを『改良』することは、いさゝか六ケ敷いことだといふことをベルンシタインに知らしめ、兼ねては、歴史の學說と實踐上の倫理の法則との差別を知らぬ混同家に警告する爲めに、カウツキーは次の如き例を用ひてゐる。『或る博物學者がその初年の著書では、太陽の光線と熱とが、地上一切の有機物を動かしてゐる究極の力であると云つたと假定する。ところが彼れは後年になつて、木の成長は、直接太陽から受ける光線と熱との分量にのみよるものだといふ見解は、彼れの學說の上から見て正しいかどうかと云ふ質問を受けた。彼は勿論、それは不條理であつて、自分の學說はそのように解釋してはならぬと云ふこと、自分は種子や土壤の性質、濕潤と乾燥の狀態、風位と風力なども、均しく木の成長に影響することを善く心得てゐる旨を答へた。すると一人の註釋家が現はれて、植物の成長に對する太陽の直接の影響と、太陽が地上に於ける究極にして唯一の力の泉源であると云ふことゝを混同して、この博物學者の學說は、最初の一方に偏した形で受け容れるべきものではなく、最後の制限せられた形、從つて一層科學的な

形で採用しなければならぬと主張する。そして彼は、斯ような形では、此の學説は最早や科學的の價値を失ふといふことは、全然見落してゐる。即ちそれは最早や、幾千年の昔から全べての百姓の知りぬいてゐる、陳腐なことゝなつてしまふのである。』

そこでカウツキーの主張は、或る大思想家が新學説を發表するに當つては、他人が此の學説を不條理に誤解する場合を考へて、あらかじめ詳細に之を否認しておくには及ばない、之はその學説を祖述する人々の常識に一任しておいてよいと云ふのであつて、この主張は確かに正當である。ところが若しカウツキーにして、たまゝ米國に於ける社會主義の文書を讀んで居つたなら、彼れは唯物史觀の限度に關するベルンシタインの論文に對しても、斯くまで手酷く罵倒はしなかつたらう。といふのは米國には、かの博物學説を聽いて、日光に當りさへすればよいと云ふので、煉瓦の塀の上に木を植へることを主張する百姓があるからである。

マルクスとエングルスとは、極く初年の著述に於いてすらも、決して社會の歴史に對する、思想の影響を否認せず、また經濟的條件の間接的の影響の、極めて重要な働らきをも認めてゐたといふ、カウツキーの記述の正確なことは、苟も彼等の哲學を、受け賣りでなくて、直接に彼等の著述に就いて學んだ全べてのマルクス、エンゲルスの研究者には明白である。勿論、私がいま記

憶する範圍内では、彼等の著述のうちには、ラモント商會の不條理な主張を直接否認した箇所は、何處にも見當らぬ。その理由は、上に引用したカウツキーの言葉の通りである。しかし斯ような說を論駁した箇處は、澤山ある。私はカウツキーの主張を援ける爲めに、マルクスから一箇所、エンゲルスから一箇所だけ引用する。但し少くともマルクスは、彼れの哲學を說明した一冊の著書をも、一篇の論文すらも書いて居らぬので、この引用は、最も多くを望む人をも滿足せしめるに充分であらうと思ふ。マルクスは一八四五年に斯う云つてゐる——

『人は周圍の狀況と變つた教育との產物であるといふ唯物論者（勿論、反マルクス的の唯物論者）の教義は、周圍の狀況そのものは人間によつて變化せられること、教育者そのものも教育されねばならぬと云ふことを忘れてゐる。』

エンゲルスは一層詳細である。彼れは云ふ——

『人は各々、その意識する目的を追求することによつて、どんな歷史が出來るかは別として、兎も角も人間の歷史を作つてゐる。そしてこの各人の意志がいろ〳〵の方向に働らき、種々なる影響を外界に與へた結果が、即ち歷史である。であるから、是等の多くの個人が、何を欲する

かといふことも重要な關係がある。意志は情慾または考慮によつて決定せられるが、この情慾なり考慮なりを直接に決定する槓杆には、またいろ〳〵の種類がある。その一部分は、各個人の外にある狀況であらうし、またその一部分は、思想上の動機、野心、眞理と正義に對する熱誠、私怨、若くは全然個人的な出來心などもあらう。けれども先づ第一に吾々は、歴史の形成に活動してゐる多くの一つ一つの意志は、多くは其の欲するところの結果とは違つた結果、時としては正反對の結果を生ずることを見た。そこでこの集合的の結果を齎す爲めには、一人一人の動機は第二義的のものに過ぎぬ。第二には、是等の動機の背後にある動力は何であるか、そして如何なる歴史的の原因が、行動者の心のうちで、是等の動機を形成するかといふ問題が尙ほ殘つてゐる。

『舊唯物論は、曾て此の疑問を起したことがない。若し舊唯物論に歴史觀なるものがあるとすれば、その歴史觀は、要するに全べての物事を、行爲の動機によつて判斷する實踐的のものである。即ち歴史過程に行動してゐる人間を、高尙な人と俗惡な人とに區別し、大抵は高尙な人が被征服者となつて、俗惡な人が征服者となると觀るのである。そこで舊唯物論に取つては、歴史の研究は餘り有益なものでないと云ふことになる。然るに吾々に取つては、歴史上の領域に

於いては、舊唯物論は自己に忠實ならぬものである。なぜならば、それは現に影響を與へてゐる理想上の動機を究極の原因と見做して、何がその背後にあるか、そして是等の動機は何であるかを研究せぬからである。そこで理想上の動機を認めた點が不徹底なのではなくて、理想上の動機を究極の動機と見做して、是等の動機を動かす原因に溯らなかつたところが、不徹底なのである。』

これは飽くまで明白である。そこでラモントがエンゲルスを嫌らつて、ドヴィールを引用したのも不思議はない。

唯物史觀を信ずる者は、實際生活の上で理想主義的たることが出來るか、實現を欲する理想を持つことが出來るか、そしてその理想に動かされて行動することが出來るか、どうかと云ふ問題は、勢ひ、有力な社會主義の思想家によつて議論されて來た。そして勢ひこの種の議論は、唯物史觀はその信奉者をして、生活上の『唯物主義的』見解を取らしめ、一切、理想を排斥せしめるものであるかの如く思はせようとする社會主義の反對者によつて、何時でも引き起されたものである。そして社會主義の理論家は、これを惡意の虛構として、無智から産まれた想像として、葬るに躊躇しなかつたのである。

フランツ・メーリングは、獨逸社會黨中の最も光輝ある思想家の一人であつて、且つ餘りに嚴格にして『偏狹』な唯物論者であるといふ攻擊を受けてゐる一人であるが、彼は此の問題について、次の如く云つて居る——

『吾々は先づ第一に、歷史的唯物主義といふ言葉にくつ附いてゐる、當今の二つの反對論を片附けよう。唯心論と唯物論とは、哲學の根本問題——卽ち理解と實在との關係、一層單純に云へば、心が先きか物質が先きかといふ問題——に對する、相反した二つの答である。唯心論と唯物論といふ二つの言葉は、もと〳〵倫理上の觀念とは何等の關係がない。哲學上の唯物論者が、最高至純な理想を抱くこともあれば、哲學上の唯心論者が、全然斯ような理想に缺けてゐることもある。けれども唯物論といふ言葉は、人々によつて絕えず讒誣を受けてゐる結果、やがては何か、不道德を意味するものであるかのようになつた。そして之が漸次に、ブルジョア文學のうちに浸潤したのである。「僞善者は唯物論といふ言葉を大食、暴飲、慾情、高慢、慾張り、吝嗇、射利、一言にすれば、彼れが內々隸屬してゐる有ゆる厭ふべき惡德と解し、唯心論といふ言葉は、善德に對する固い信仰、博愛、そして多くは彼れの口癖にする「より高尙な世界」——人間は何だ？、半ばは野獸、半ばは天使と歌ひつゝ、餘り「唯物的」だつた結果として、必

ず來るべき有ゆる悲慘に遭遇した時には、彼れはこの「より高尚な世界」を信ずる――と解するのである。(これはエンゲルスから引用した言葉である)。若し歴史的唯物論といふ言葉を、斯ような第二の意味で用ひるなら、今日は歴史的唯物論者であると公言するだけの勇氣を持つ爲めには、大に倫理上の理想主義を抱いて居らねばならぬ。なぜならば、其の結果は必ず貧乏と、迫害と、誹謗とを招くからである。然るに歴史的唯心論を主張することは、全べての阿世者流の仕事である。なぜならば、それは有ゆる地上の財寶と、實入りのよい地位や、勳章や、稱號や、位階に對する、最もよい前途を與へるからである。』

讀者諸君の見られる通り、ラモント選手のように、社會主義者は理想主義者たり得るといふ思想に震るへ上がるどころか、メーリングは、唯物論者乃至は單に社會主義者たるには、倫理的理想主義を要すると云ふのである。

サディー・グンターは獨逸に於いて、社會主義者からもブルジョアからも、均しく哲學者と認められてゐる唯一の人であるが、彼も亦た同じことを云つてゐる。『ノイエ・ツアイト』(一八九七――九八年、第四十一號)の誌上に現はれた一論文のうちに、彼はこのような言葉を用ひてゐる――

『教育のあるブルジョア仲間の間には、唯物史觀は一切の理想を排斥するものだと云ふ、强い偏

見が固く根ざしてゐる。例へばドクトル・バルトのような、理論上では、唯物史觀の方向に進んでゐて、單に無理解を示すに過ぎないような僅かの文句で唯物史觀を片附けてしまはぬ人々ですらも、全然これに同意せぬのは、右の偏見によるものである……。然しながら吾々は第二の反對論、即ち實踐上の理想主義は、理論上の理想主義を基礎としなければならぬといふ、廣く行はれてゐる形而上學的の誤謬について、一層詳細に論じなければならぬ。此の點について、吾々は、シタムラーは記入の均衡しない、とうてい維持しがたき複式簿記を用ひてゐるのだといふことを證明しなければならぬ。そして吾々は、之を實證的に論證しなければならぬ。即ち（一）何故に精神上の現象が、原因結果の連鎖によつて働かなければならぬかと云ふこと、（二）何故に歷史的唯物論――これは注意して普通の唯物論と區別しなければならぬ――のうちに、實踐上の理想主義が成り立ち得るばかりでなく、必要缺くべからざるものであるかと云ふことである。

『斯ような場合には、理想は最も至大な衝動力となる。そして其の目標が、よし求めてゐるような方法で達し得られぬ場合でも、それは依然として推進力を持つのである。なぜならばそれは力を強める。そしてもと〳〵目差された解決方法が不適當だと知れた場合には、更に他の解

決方法を求めしめるからである。即ち資本主義の羈絆からの解放と、一層調和ある社會制度の建設と云ふ社會主義の目標が、斯くも力強く民衆を捉らへ、彼等を前方に推し進め、まだ現在の制度の存續してゐるうちにも、彼等をして奮起せしめるのは之が爲めである。……この社會生活の理想こそ、即ち今日の社會主義者の理想である。社會主義が生産機關の國有を主張するのは、無産者がより潤澤に食ひ且つ飲むことが出來るといふ、物質的の理由からではない。ドイツ社會黨の全員が信奉するエルフルト綱領は、生産手段の社會化は、資本主義的生産方法を變じて、「悲慘の泉源から最高の幸福と人類の圓滿な發達の泉源」たらしめる爲めに必要なことを最も有力に述べてゐるのである。』

『……吾々は「圓滿な發達」といふ一句を見落してはならぬ。……果して然らば、生産手段が圓滿な發達といふ吾々の目的を助ける場合にのみ、之を要求することが出來る。即ち國有といふことは單に手段であつて、目的そのものではない。理想――國有はこの理想の爲めに望ましいものである――は人間の完成である。此の理想こそ、それ以上の發達に必要な動力である。そしてこの動力は進化の結果であると共に、更に進んで吾々の目的を實現する爲めに、必要缺くべからざるものである。……』

『それ故に歴史的唯物論は、實踐上の理想主義を破壞するどころか、反對に、曾て如何なる制度も成就し得なかつたほど、理想主義に大なる力を與へ、且つ之を純化するものである。』

私がこゝに論じようとすることは、私が純なる人間性に期待した『眞理と正義の觀念』が、反對論者に戰慄を與へたといふことに就いてゞある。恐らく此の反對論者は、自分もまた、私がこの戰慄すべき責任から除外した連中の一人だとでも思つたのであらう。さもなくば彼は私を、『その一人だ』とは云はなかつたらう。……ところが彼は、有名な『小さいが然し獰猛な豚』の性質を吾々に教へることに止どまつてゐる——私は曾て、吾々の友人の乾分の名譽と聲望とに對して、何等の禍心をも抱いたことはないから、之はいさゝか的を外づつて居るが——そして彼れは或る古い著者が、次の如く云つたことを教へて呉れる——『この地上で、自分を愛する以上に、汝を愛するものは、唯だ犬だけである』。斯くて有ゆる時代の智慧の泉を汲み盡し。そして思ふ存分私をへこませた上で、彼は『哲學的の牝豚』を引つ張り出して、眞底から嫌ひな全べての『理想主義者』に最後の止どめを刺す。

私はさん〳〵な目に逢はされたが、それでもまだ一つの慰めが殘つてゐる。といふのは、私に

は結構な仲間があるといふことである。一例を擧げれば、ほんの近頃、プレハノフが『最も偏狹な』唯物論のお固まりとして、社會主義哲學者の標本として提出したステルンである。彼れはドイツ社會黨の出版部で發行したスピノザの哲學に關する著書のうちに、私と同じ立場を取つてゐる。そして最後に、『高尚な理想主義』に對する憎惡を分つ爲めに、もう一度カタツキーを引つ張り出す。彼れはベルンシタインに對する答辯のうちに斯う云つて居る——

『觀念學者は、最早や支配階級ではなくなつた。と同時に、彼等は全然、一つの階級でもなくなつた。彼等は格段な階級的利害を有する、緊密な一階級ではなくなつた。そして非常に掛け離れたまち〳〵の利害を有する個人と仲間との集合物になつたのである。繰り返へして云つた通り、彼等の利害は、一面、ブルジョアと利害を均しくして居るし、又た一面には、無產階級の利害に觸れてゐる。それと同時に、彼等はその敎育のお蔭で、能く一段高い見地から、人に先だつて社會の發達を考察することが出來る。斯ように知識階級の代表者は、明白な階級的利害に動かされて居らず、また頭の働らきで得た社會現象の相互關係に對する知識を土臺にして行動することも屢々であるから、彼等は階級的利害と對立した意味での、社會全體の利害の代表者——經濟的動機から獨立した思想の代表者——を以つて任じてゐる。然るにこの知識階級は、

不斷に增加してゐる。そして此の增加に伴なつて、階級的利害に對する共通の利害が增大し、藝術、科學、並びに經濟的勢力に對する倫理的見地が獨立を增して來る。ベルンシタインの言葉は斯ような意味に解釋した場合にのみ、理解し得るものとなり、そして神祕的の性質も無くなつて來る。けれども其の代り、同時に、唯物史觀に反對する何事をも立證せぬものとなるのである。』

一九〇五年十月十日の『ノイエ・ツアイト』の誌上に、アントン・メンガーの著書『新道德哲學』(ノイエ・ジッテンレーレ)を批評して、カウツキーは斯う云つてゐる——

『政治上社會上の闘爭は、敵に對する道德的の義憤がなくては不可能である。

『或る政治上社會上の狀態や、社會的勢力の壓迫に對する道德的の義憤は、階級的差別の表現の、最初にして最後の形であり、基礎的の形であつて、階級闘爭の最も根元的な、そして最も永續的な發條(ぜんてい)である。』

次にカウツキーはメンガーの倫理說と、この倫理說は唯物史觀の倫理說に一致するといふ或る批評家の記述とに言及して、次の如く云つて居る——

『歴史的唯物論、即ち道徳は社會の物質的條件から生ずるといふ解釋は、道徳は物質的勢力によつて生ずるといふメンガーの解釋と同じであると云ふのは、しば〳〵繰り返へされてゐる物質的條件と個人の物質的利害との混同――その結果は、一切の道徳は利己主義に歸着するといふ低い倫理說の水準にマルクス說を引下げる――と均しく誤りである。唯物史觀を斯ように說明して宣傳する人々は、自分では立派なマルクス主義者と思ふてゐるかも知れぬが、實は餘りマルクスの教義の信用を增さぬ人々の仲間であつて、マルクスは彼等に身震ひをする。そしてどうか此の連中と一緒にされぬように願つてゐる。』

カウツキーはまた近著『倫理學と唯物史觀』のうちに斯う云つてゐる――

『變化しゆく社會狀態と、停滯する道徳との間の矛盾が、ます〳〵甚しくなることは、保守的分子、即ち支配階級の間の不道徳と、僞善と、冷笑的態度とが、ます〳〵甚しくなることに現はれてゐる。そして之はしば〳〵社會的本能の減退と相ひ伴ふてゐる。然るに新興の被搾取階級に與へる影響は、全く違つてゐる。この階級の利害は、現存の道徳を產み出した社會的基礎とは、正反對に立つてゐる。彼等は之に服從すべき何等の理由をも有せず、之に反對すべき有ゆる理由を持つてゐる。現存の社會的秩序に對する彼等の自覺が成長するに伴ふて、彼等の道徳的義憤と、

時代おくれの舊道德に對する彼等の反對とは增大する。彼等は之に對立して新しい道德を立て、之を社會全體の道德として主張する。斯くて新興階級の間には、一つの道德上の理想が起り、この階級の力が加はるにつれて益々有力になる。之と同時に、この階級の社會的本能は力を增し、殊に階級鬪爭によつて發達する。斯くて新しい道德的理想の力が加はるにつれて、之れに對する熱誠も亦た增大する。斯ように保守的な衰滅してゆく階級の不道德を增大するその同じ進化の過程が、益々その數を增加する新興階級には、吾々が倫理上の理想主義と呼ぶところの、一團の現象を生ずるのである。但しこの倫理上の理想主義は、哲學上の理想主義と混同してはならぬ。そして哲學的唯物論に傾く傾向のあるのは、正しく新興階級であつて、之に反して衰滅階級は、進化の自然の進路によつて、彼等の運命の定まつたことが分かり出す瞬間から、哲學的唯物論に反對する。彼等は何か、超自然的な神力か倫理上の力かゞ現はれぬ限りは、この運命から逃れることが出來ぬのである。

（註一）ラモントの論文は、『積極的及び消極的社會主義』（Lamonte, Socialism, Positive and Negative. Chicago, 1907.）と題する小册子を看よ。

（附錄一）唯物史觀と一個人

マルクスの唯物史觀が、一番しつこく誤解されてゐる點の一つは、歴史の進路に對する個人の影響如何といふ問題である。マルクスの歴史學說は宿命論を說くものであつて、歴史の進路に影響を與へるといふ點からは、個人の行動の餘地を認めぬといふ、勝手に造つた事實を長々と說くのが、或る種のマルクス批評家の得意の常職である。彼等は如何にも、マルクスが歴史を目して人間の意思とは無關係乃至は沒交涉に彼等の智能に影響し、彼等の制度と運命とを形成するところの、經濟的要因と名づける槓杆によつて推し進められ、そして豫め定められ、若くは豫め命令された進路に沿ふて走る一種の自動機械の如くに想像し、又は說明したかのように、明白に記述して居るか、さもなくば暗々裡に臆斷してゐるのである。是等の紳士諸君によると、マルクスは其の行爲によつて歴史の頁を塡ずめてゐる人間が、自ら爲しまたは爲さんとした事柄に就いて、何を考へ何を欲したかといふ事は、些つとも顧みなかつたのである。彼等はマルクスと其の學徒とによれば、歴史は豫め定められたもの（彼等のうちの一人たりとも、何者が豫め定めたかは、

會て言及した者が無いが）だといふにとを吾々に保證する。そこで彼等は好んで、唯物史觀を、『經濟的決定論』と呼ぶのである。『歴史』の進路は豫め定められたものであり『經濟的要素』、はこの豫定の進路の上に歴史の車を走らせる動力なのであるから、必然に、社會の各員は別々にもまたは全員殘らず集合的にも、如何なる方法によつても、また一人々々乃至は集合的にどんな事をしても、歴史の宿命的の進路に何等の影響をも與へることは出來ぬといふことになる。そこで人間は『歴史』の進路を變更し、促進し、制限しようとする、一切の智的努力を放擲しなければならぬ。そして運命が彼れに命じた必然を、おとなしく待つて居らねばならぬ。すると彼れが待つてゐるうちに、この必然は、『經濟的要素』といふ作用によつて齎らされるのである。

彼等は先づマルクスの唯物史觀を、『經濟的決定論』に變更して宿命論に掏り替へておき、さて其上で、之は全べての人間の智力的活動、就中『理想主義的』な活動を危くするものだといふ理由の上に、マルクス説に對して斷乎として反對する。勿論、マルクスにせよマルクス主義者にせよ、勝手に想像された彼等の宿命論の影響を蒙らないで、人間の思想と行動との有らゆる方面で眞に驚歎すべき智的活動を示したことは、容易に證明することが出來る。否な最も驚くべきことは、斯ような彼等の活動は、多くは、想像し得られる最も『理想主義的』なものだつたと云ふ事

である！。しかしそうだつたなら、マルクス主義者は決して徹底して居らぬ。そこで吾々は、唯物史觀は宿命論であるといふ主張には、果してどんな根據があるか、そして唯物史觀に從へば、歷史形成の要素として、社會の各員は果してどれだけの力を持ち、又たその力の限度は如何といふことを明かにしなければならぬ。

先づ第一に、決定論に就いて論じよう。苟もマルクスの書いたものゝ中には、經濟的決定論といふ言葉を（この場合に用ひられてゐるような意味で）彼れの歷史學說に適用してよいといふ證據は、絕對に無いと云つて誤りはない。また經濟的決定論といふ言葉そのものも、または此の言葉が表はしてゐる思想も、彼れの如何なる著述の中にも見當らぬ。況んやこの思想は、彼れの學說體系の全精神、は、全然似ても附かぬものである。決定論とふ思想は、唯物論と結び附け得られぬものではないが、それにも拘らず、此の思想は本質に於いて、例へばヘーゲルのような、純粹な唯心論的體系の一部を成すものである。

宿命論に就いては、之は二重に眞理である。『人間は自分の歷史を造る』と云つた人を捉まへて宿命論者だつたと主張するのは、驚くべき不合理であつて、しつこく繰り返へされたればこそ、僅かに人々の注意を惹きもしたのである。尤も此の問題に對するマルクスの立場如何を決定する

爲めには、マルクヌの片言雙語を捜し出して根據とする必要はない。既に本書の本論に於いて、殊に『無産階級の歴史的任務』の章に於いて見た通り、現在の資本主義の社會から將來の社會主義の社會に變形する爲めには、無産階級が非常な大任を帶びてゐるのである。そしてマルクスが、この大任を無産階級に負はしめたのは、飽くまでも、彼れの全學說體系に基づいてゐるといふことは、苟も注意して彼れの體系を研究した人には、充分に明白なことである。マルクスが資本主義的社會の經濟的條件の發達を說明した學說のうちには、純粹な機械的作用で社會主義が實現されると云ふ意味のことは、絕對に含まれては居らぬ。否な全く反對に、本論のうちに詳說した通り、資本制度の純機械的の倒壞といふことだけに就いて云つても、それは人間の意識的の行動の參與を無用とするような物理的の倒壞ではなくて、寧ろ精神的の破産である。思ふに資本制度のうちには、それが社會民主的の制度には發達しないで、却つて資本家階級の少數貴族が生産手段を集合的に所有する、一種の新しい封建制度、乃至は新しい奴隷制度に墮落することを防止する力は、全然無いのである。

資本主義から社會主義への推移は、意識的にして有目的な人間の行動といふ、能動的の要素が必要なばかりではない。生産の條件と社會の制度との衝突から生ずる階級鬪爭によつて、社會の

進化が行はれるといふマルクスの社會進化の全學說は、マルクス自身の解したところでは、社會の改善の爲めにする人間の努力が這入つて來ることを以つて、この『衝突』の必要にして缺くべからざる一部分とするものである。これは本論にも指摘したように、マルクスは、舊制度の下に最早や生產の繼續が不可能となつた結果として、初めて革命が來るとは云はないで、舊制度が生產の『桎梏』となつた時、卽ち精神上の判斷と、能動的な人間といふ要素の意志をも含めた、一定の狀態の結果として、革命が來ると云つたことを、讀者諸君に記憶して貰へば足るのである

マルクスの學徒が、マルクス說を斯ように解釋したことは、殆んど疑ひがない。附錄(一)に引用した最も知名のマルクス學徒の、實踐上の理想主義に對する見解は、疑ひの餘地の無きまでに之を證してゐる。そこで本論中に引用した是等の見解については、玆には無用の反覆を避け、唯だ露國に於ける重要なマルクス學徒たる、プレハノフの見解を附け加へるに止どめておく。プレハノフの見解を、追加的の證據として提出することは、單に彼れの見解が、マルクス主義者の間に重きを爲してゐる爲めばかりでなく、上に引用した人々よりも、プレハノフは特に一層この點を詳說して居つて、マルクス主義者が歷史に對する『個人的の要素』を認めた事實を示すばかりでなく、其の限度をも示してゐるから、極めて重要なことだと思ふ。

プレハノフは先づ第一に、マルクス主義者は個人に對しては、歴史の進路に影響を與へる力を認めぬといふ多くの人々の意見には、多少の道理があることを認容する。勿論これは、マルクスや彼れの直接の學徒の書いたものに、少しでも斯ような意味のことがあるからではなく、謂ゆるマルクス主義者の散漫な言葉や不精確な文章のうちには、斯ような意味のことがあるからである

プレハノフは斯う云つて居る……

『或る主觀論者は、歴史に對する『個人』の働きを大きくしようとするので、人類の社會的發達の過程に、何等の歴史的法則のあることをも認めない。ところが之に對する最新の反對者はこの發達の進化過程を力説しようとする爲めに、歴史は人間の造るものであつて、從つて個人の行動は必然に之に影響すると云ふことを、明白に忘れてゐる。彼等は個人を以つて、計算に入れなくてもよい極微量と見做してゐる。けれども理論の上からは、斯ような見解は、最も極端な主觀論者の見解と同じく、許すべからざるものである。』

プレハノフは此の問題を詳細に吟味し、これに關係した歴史上の實例を分析した上で、次の結論に達してゐる――

『そこで或る個人は、その特異な性格によつて、歴史上の出來事に影響を與へ得るといふこと

になる。そして時としては、此の影響は可なり重大である。けれども斯ような影響の可能性とその大きさとは、社會の組織により、その諸勢力の關係によつて、限定せられてゐる。個人の性格は、社會關係が之れを許すが如き場所に於いてのみ、社會關係が之を許すが如き時に於いてのみ、また社會關係が之を許すが如き範圍に於いてのみ、社會的發達の一要素となるのである。

『個人が歴史の進路に及ぼすことの出來る影響の範圍は、その個人の能力にもよると云ふかも知らぬ。之に對しては、吾々は喜んで讓歩する。けれども個人は、社會組織のうちに必要な地位を占めた上でのみ、初めて其の能力を發揮することが出來る。……故にこの社會の組織こそ或る一定の時期に於いて、優ぐれた人物、乃至は平凡な人物が受持つことの出來る役割――從つて社會的影響――を限定するものである。』

個人が、一個の歴史的要素といふ榮位に上ぼるといふことは、歴史上に於ける偶然または偶然の出來事といふ、之と密接に關聯した問題を引き起す。プレハノフは次に之を説明して、斯う云つて居る――

『ヘーゲルは、一切の有限物には、偶然といふ要素があると云ふ。科學上では、吾々は「有限

なもの」のみを取扱ふべきものであるから、科學がその研究の對象とする一切の過程には、偶然的な要素があると云つてよいことになる。この結果は、現象の科學的研究を不可能とするであらうか。決してそうでない。偶然は相對的の事である。それは唯だ、必然の過程が互ひに交叉する場合にのみ現はれる。ヨーロッパ人がアメリカに現はれたことは、メキシコやペルーの住民に取つては、是等の國々の社會的發展の結果ではなかつたといふ意味では、偶然の出來事であつた。けれども中世の末葉に當つて、ヨーロッパ人の間に起つた航海熱は、單なる偶然の出來事でない。またヨーロッパ人が容易に原住民を支配したことも、單なる偶然の出來事ではない。更にヨーロッパ人がメキシコとペルーを征服したことも、單なる偶然の出來事ではない是等の出來事は、究極まで推し詰めれば、二つの勢力の結果によつて生じたものである。即ち一方には、征服國民の經濟狀態、他方には被征服國民の經濟狀態である。そして此の二つの勢力と並びにその結果とは、科學的研究の法則に從つて、充分に考察することが出來る。』

次にプレハノフは進んで、個人の影響は、個人に割附けられる役割と、如何なる種類の個人がこの役割を受けるかと云ふことは、社會組織の性質如何によつて定まると云ふ意味で、その社會組織の內部構造と他の社會との關係とによつて限定せられて居るといふ事實以外にも、個人の影

響が社會組織（社會組織といふことは、究極まで推し詰めれば、社會の經濟的關係といふことになる）から受けてゐる今ま一つの制限がある。と云ふ事實を示そうとする。と云ふのは、社會的發達の方向、社會制度の進化の大體は、如何なる個人の行動によつても、又は如何なる一團の個人の行動によつても、左右し得ぬと云ふことである。プレハノフは、フランス革命に實際には起らなかつた或る出來事が起ることも出來、若くは起つた出來事が起らぬことも出來たといふ可能性と、並びに斯ような變更の爲めに、この歴史上の大事件が如何なる影響を受けたらうかと云ふことに就いて、斯う云つて居る——

『すべて斯ような出來事の變化は、或る範圍までは、ヨーロッパの政治生活に、その結果として經濟生活に、影響したかも知れぬ。けれども此の革命運動の究極の結果は、如何なる事情の下にも、實際の成り行きの反對にはならなかつたらう。有力な個人は、特異な精神と性格とによつて、一つ一つの出來事の形を變へ、幾らかは、その比較的重要でない結果を變へることが出來たらう。けれども事變の一般的の趨向に至つては、個人以外の他の勢力によつて大體を定められて居るものであつて、彼等は之を變更することは出來ぬ。』

斯ようにプレハノフは、個人の影響の領分を定め、その限度を示した上で、この界限内に於け

る個人の行動の可能性と、斯ように限定せられた個人の影響の眞の意味とを明かにしようとする彼は斯う云つて居る――

『偉大な人物は、彼れの個性が、歴史上の大事件に、個人的の形を與へるから偉大なのではなくて、彼れをして其の時代の大なる社會的必要――一般的の原因と特殊な原因との影響の下に發展した必要――に最もよく奉仕することを得せしめる特質を持つてゐるといふ事實の爲めである。カーライルは「英雄及び英雄崇拜」のうちで、偉人を「着手する人」と呼んでゐる。これは極めて適當な名稱である。偉人は實際、着手する人である。なぜならば、彼れは他人よりも一層遠方を見、他人よりも一層熱心に欲求するからである。彼はそれ以前の社會の智的發達によつて、其の時代の問題として提出せられた學問上の問題を解決し、それ以前の社會關係の發達によつて生じた新しい社會的必要を明かにし、自ら是等の必要を滿足せしめることに着手する。彼れは出來事の自然の進路を、止どめたり變更したりする意味で英雄なのではなくて、彼れの行動は、この必然にして無意識的な進路の、意識的にして自由な表示であるといふ意味で英雄なのである。彼れの重要は茲にある。彼れの力は茲にある。そして之れは非常に重要なことであり、また非常な力である。』

正誤表

頁	行	誤	正
一一	一〇	『反マルクスの説文書』	『反マルクス説の文書』
三三	九	急激には起らしい。	急激には起らぬ。
三七	三	しよとする	しようとする
七八	四	味ひによて	味ひによつて
八一	一三	増大し行く	増大して行く
一〇五	九	生産力をもしないが、	生産をもしないが、
一二五	五	用ひたいといふ	用ひたといふ
一三五	四	まは住	または住
一三九	一〇	知るである	知るのである
一七一	一一	パワータは云ふ	バワークは云ふ
一七一	六	不熟勞働	不熟練勞働
同	一四	得るとい事實	得るといふ事實
二五〇	七	購力	購買力
二九〇	六	精確でたある	精確である
二六四	九	オツペハイマー	オツペンハイマー
二七六	三	信じたとは	信じたことは
二九三	七	マルス主義者	マルクス主義者
二九六	五	然しそれとも	然しそれとても
三〇七	九	差し當りに	差し當り
三三〇	七	重要視すことに	重要視することに
三七四	一	本主義で	本主義國で
三八六	七	費消せらる	費消せられる
三九四	一二	斯よな	斯ような

昭和二年十月廿九日印刷
昭和二年十一月二日發行
昭和三年二月廿日三版

マルクス主義體系
定價一圓也

印檢
社畜白

譯者　山川均

發行者　東京市神田區美土代町二ノ一
中村德二郎

印刷者　東京市牛込區早稻田鶴巻町四〇三
谷口熊之助

發行所　東京神田美土代町二ノ一
振替東京二五四〇〇番
白揚社

マルクス主義叢書出版目錄(一)

ルイス・ブディン著 山川均譯 **マルクス主義體系**（第一編）	山川均譯 **マルクス經濟學**（第二編）	ブハーリン監修 山川均譯 **マルクス主義政治講話**（第三編）	エンゲルス著 西雅雄譯 **家族私有財産及國家の起原**（第四編）	ブハーリン著 廣島定吉譯 **史的唯物論の理論**（第五編）
四六判假裝	四六判假裝	四六判假裝	四六判假裝	四六判假裝
450頁	450″	420″	380″	610″
1.00錢	1.00″	1.00″	1.00″	1.00″
.21錢	.21″	.24″	.20″	.27″
本書はマルクス學說の全體を解說した處に特色を持つて居る。哲學、經濟學、說社會學說と區別され之を全部知らればよく理解されないと云はるゝマルクスの學說は本書に依つて始めて會得さるゝ譯である。	ウンターマンの原著、マルクスの經濟學を平易に明快に、遺憾なく說いた書として本書は絕好のものである。今やマルクスの經濟學は日常常識化しつゝある際、本書は何人も必讀の要あり。	無產階級は經濟學を如何に取扱ふべきか、經濟生活と政治とを如何に進展せしむべきか、マルクス主義的に之を敎へたものが、本書であつて其の明徹なる立論と平易直截なる說明とは無產階級に取つて實に無二の敎典と云はれ、各國勞働團體の敎科書となりつゝある。	マルクス主義の重要な古典文書の一つである。唯物論的歷史研究法の具體的解說、興味ある人類原始生活の批判的叙述三千年來の我が文明の基礎たる一夫一婦制、私有財產制及國家組織の沿革と其の行方との究明等々、苟くも社會生活に就て一日も忘れられぬ問題である。	マルクスの唯物史觀は幾多の著作家に依つて御都合主義に解釋され、改造せられやうとする、本書は著者がマルクスの遺圖に從ひ唯物史觀を平易明快に說明し、發展せしめたるものであつて、ABCと並んでブハーリンの二大名著と云はる。譯文正確、定譯本とするに足る。

1930

LIBRARY OF CONGRESS
0 020 208 843 0

$1.00

Marukusu shugi taikei
Budin, Louis;880-04 Yamakawa, Hitoshi, 1880-1958
12269167
Library of Congress, Asian Division
[43] marukusushugitai00budi
00202088430
Jun 11, 2014